

# 「つぶやき岩」と遠い海の記憶

平成 28 年 9 月

沼尾 利郎



## 1 晩夏の哀しみ

夏の終りの寂しさ・哀しさは、日曜日の夕方に似ています。大勢の人々でにぎわった夏祭りや花火大会も終わり、楽しかった日々はいつの間にか過ぎ去りました。気が付けば友達もいなくなり、大人たちは何事もなかったかのように過ごしています。オリンピックや高校野球の、あの熱狂は一体どこへいったのでしょうか。「もっといっぱい遊べたのに…」という後悔の念と同時に、「楽しいこともいつかは終わってしまう」というあきらめの気分が入り混じり、“不完全燃焼の夏”は今年も過ぎていくのです。

今どきの子供たちは、夏休みの宿題をどうしているのでしょうか？昔と違って平成の子供は夏休みの過ごし方や宿題（自由研究）を事前によく考え、計画的で無駄のない（賢い）時間の使い方をしていることでしょう。考えてみれば私が子供の頃は（昭和 30 年代）、実にいい加減に（適当な）夏休みを過ごしていました。宿題も最後の最後に何でもいいから出したようなものであり、親たちも忙しくて子供のことまで手が回らなかった家が多かったように思います。その代り、遊ぶ時間だけはたっぷりありました。私は塾や習い事もなく、川で犬と一緒に泳いだり岩場から飛び込んだり森でクワガタを捕まえたり、夏休みが永遠に続くような気分で毎日を過ごしていました。ラジオ体操も 8 月末まであり、今ではほとんど見ないような真っ黒な顔をした子供ばかりでした。思えば平和な時代だったんですね。



## 2 つぶやき岩の秘密

夏休みと言えば家族で出かけた海水浴や磯遊びなどが思い出されますが、実体験ではないのに今でも鮮明な記憶として残っているのが、「つぶやき岩の秘密」という TV ドラマです。これは 1973 年に放映された「NHK 少年ドラマシリーズ」の 1 つであり、「秘密の洞窟」を舞台に謎めいたストーリーと怪しげな登場人物たち、そして何より印象的な主題歌「遠い海の記憶」と相まって、今考えても完成度の高い作品だったと思います。ドラマは幼い頃に海の事故で両親を亡くした孤独な少年が、旧日本軍が地下要塞に隠したと言われる金塊にまつわる秘密や「つぶやき岩」に秘められた謎と恐ろしい事件に巻き込まれ、やがて両親の死の謎が解き明かされる中で少年が大人へと成長していく、というものです。

このドラマの素晴らしさはメリハリのあるストーリーだけでなく、海岸の地下要塞や抜け穴のある不気味な神社、亡き母の泣き声が聞こえるような洞窟や秘密の金塊など、太平洋戦争の残骸を随所に漂わせる場面設定などが何とも魅力的であることです。少年なら誰でも探検したくなるような場所が次々と出てきて、観ているうちにどんどん引き込まれていきました。特に印象的だったのは少年が乗る小舟を上空から俯瞰するエンディングであり、次第に小さくなる舟と夏の陽射しに光輝く海をバックに流れてくるのが、ドラマの主題歌である「遠い海の記憶」（歌 石川セリ）でした。少年ドラマには似合わない「憂い」に満ちたその歌詞と、けだるそうな歌声が何とも不思議な感覚であり、子供を対象とした夕方の時間帯にこんな重厚なドラマを NHK が放送したことが本当に意外でした。

原作者の新田次郎は山岳小説で知られた人ですが、ドラマには様々な「海」の表情が魅力的かつ効果的に出てきます。昼間の穏やか海、月夜の静かな海、夕焼けに輝く海、太陽を照り返すキラキラした海、暗く恐ろしい嵐の海など…。ひと夏の様々な出来事を通じて、少年がいつ

か大人に成長していく姿が丁寧に描かれており、実に見ごたえのあるドラマだったと思います。

いつか思い出すだろう 大人になった時に  
あの輝く青い海と 通り過ぎた冷たい風を

(中略)

いつか思い出すだろう 大人になった時に  
あの輝く青い海が 教えてくれたものは  
何だったのだろうかと…



### 3 八月の濡れた砂

「夏の海」「石川セリ」とくれば、1971年公開の「八月の濡れた砂」(監督 藤田敏八)を忘れることはできません。一部に熱狂的なファンを持つこの映画は、夏の湘南を舞台にして、やり場のないエネルギーを持て余した無軌道な若者たちの姿を描いた作品ですが、ラストシーンで男女4人を乗せたヨットが、空撮で次第に小さくなる映像とエンディング・ロールの背景に流れてくるのが、石川セリのテーマ曲「八月の濡れた砂」でした。民族楽器アルバの印象的な音色と退廃的で気だるい歌唱が、何をやっても満たされない若者の行き場のない感情や70年代初頭という時代の気分をよく表していました。

あたしの海を 真っ赤に染めて  
夕陽が血潮を 流しているの  
あの夏の光と影は どこへ行ってしまったの  
悲しみさえも 焼き尽くされた  
あたしの夏は 明日も続く

(中略)

あの夏の光と影は どこへ行ってしまったの  
思いでさえも 残しはしない  
あたしの夏は 明日も続く

当時の私はこの映画をリアルタイムで観たのではなく、東京で大学浪人をしながら聴いていたある深夜放送で知りました。「おたく」とか「サブカルチャー」という言葉がまだなかった70年代前半に、その番組ではヒットソングもかけずパーソナリティー独自の価値観で、「マイナーだけど面白い」音楽や映画、「売れてないけど変におかしい」役者やアーティストたちがたくさん紹介されていたのです。深夜3時過ぎという誰も聴いていないような時間帯に、若者だけの話題や小さなイベントをパロディー混じりに取り上げるその内容は、とても新鮮で楽しいものでしたが、地方出身の受験生にとっては少し刺激が強すぎたような気もします。「局アナなのにそんなこと言って大丈夫なの？」とリスナーに心配させるほど過激な時もありましたが、番組のパーソナリティーこと林美雄（はやしよしお）さんには、“自分でいいと思ったものを信じて、それを追いかけるんだ”ということを教えて頂きました。

本当にいいものは 隠れている。  
だから、自分で探さないといけない。

(林 美雄)